

# 『遠野物語』に見る柳田國男の考古学的関心

黒田篤史

Kunio Yanagita's Archaeological Interest of Tono-Monogatari (The Legends of Tono)

KURODA Atsushi

はじめに

- ① 問題の所在と先行研究
- ② 『遠野物語』一一二話と『考古古物號記』
- ③ 佐々木喜善は何を語ったか
- ④ 柳田國男は何を感じたるまゝ、書いたか  
おわりに

## 【論文要旨】

柳田國男の記念碑的著作『遠野物語』の一一二話に考古学的な記述があることは、これまであまり注目されてこなかった。本稿はこの『遠野物語』一一二話の成立過程とその背景を明らかにすることで、柳田國男の考古学的関心について考察するものである。

『遠野物語』の成立に最も深く関与しているのは、話者である佐々木喜善の語りである。本稿では、一一二話に何が記されているのかを紐解いた後、佐々木の語りの原形を探るため、彼が少年時代に採集した考古遺物のリストである『考古古物號記』を読み解いた。そこには、佐々木が主に地元で採集した遺物の地点やその形状などが記されていて、一一二話の内容と大まかに一致する。また佐々木が後年著した「地震の揺らないと謂う所」にも考古学的記述があり、佐々木が柳田に一一二話の元になる話を語った意図を見出すことができた。

このように佐々木の語りの原形を明らかにしていくことで、佐々木の語りの意図は必ずしも『遠野物語』一一二話に反映されていなかったことが見えて来た。このズレを生んだのは、柳田の意図が介在したためである。柳田の意図はどこにあるのか、佐々木に聞き書きを行っていた頃に柳田によって著された「天狗の話」や「山民の生活」に、その答えを見出すことができた。柳田は鎌倉時代頃まで少なくとも東北地方には先住民にあたる「蝦夷」と「日本人」は隣接する地域に併存していたという先住民観を持っていた。そうした考え方が『遠野物語』一一二話に色濃く顕れていることが、これらの文献を比較することで明らかとなった。本稿の検討から、柳田の考古学的関心は、日本人と先住民の関係を探るために寄せられていたことがより明白となった。

【キーワード】 柳田國男、佐々木喜善、『遠野物語』、『考古古物號記』、先住民観、考古学

## はじめに

柳田國男（一八七五—一九六二）の代表的著作として知られている『遠野物語』は、現在の遠野市土淵町山口出身の佐々木喜善（一八八六—一九三三）の語った遠野の伝承を「一字一句をも加減せず感じたまま、を書き」（柳田一九一〇a）全一九話にまとめたもので、一九一〇年六月一四日に三五〇部が自費出版された。「日本民俗学の発祥の記念塔ともいべき名高い名著」（三島一九七〇）として、また「忠実な記録でありながら、柳田の普遍的な魂によって文学にまで昇華することができた」（谷川一九七二）文学作品としても評価されている。

この『遠野物語』には遠野の地勢や成り立ち、信仰に関する事、不思議な生き物に関する事、習俗、不思議な場所の話などが柳田の独特の文体で書かれている。その中で、不思議な場所「蓮台野」（デンデラノ）の記述がある一二話に、その地で出土する石器や土器の話が登場する。本稿ではこの『遠野物語』一二話を読み解いて、佐々木喜善が少年時代に採集した考古遺物リスト『考古古物號記』との比較を行い、佐々木が柳田に何を語ったのかを明かにする。更に『遠野物語』と同時期に書かれた柳田の著作とも比較し、柳田の考古学的関心の所在を明らかにしていくことを目的とする。

## ① 問題の所在と先行研究

『遠野物語』には初版が出版されるまでの原稿である「初稿本三部份」が残されており、成立過程を垣間見ることが出来る。石井正己は「初稿本三部份」である「初稿本」（毛筆本）、「再稿本」（清書本）、「校正刷り」や柳田の手帳と書簡、佐々木の日記などを分析し『遠野物語』の成立過

程を明らかにしている（石井一九九七）。石井の研究によると、柳田が佐々木から聞き書きを行ったのは、一九〇八年一月四日から一九〇九年五月までであり、「初稿本」は主にその間に書かれたとされる。その後、柳田は一九〇九年八月二三日から二七日まで、不確かな事柄の確認と自ら原風景を確かめておくことを目的として遠野を訪れた。「初稿本」には「一」と「二」があり、この一二話のもとになった話は一〇五話として「二」に書かれている。石井は「二」を一九〇九年四月以降に書かれ、尚且つ、それを遠野には持って行っていないと推定している（石井前掲）。つまり、一二話は一九〇九年四月から五月の間に書かれたものであると言ふことができる。

その後一九一〇年三月二日以降に書かれたという（石井前掲）「再稿本」と、「初稿本」の内容を比較すると、多少の語順の入れ替え等はあるが内容に変更はない。『遠野物語』一二話の内容は、柳田が遠野を訪れて見たことや聴いたことは反映されておらず、佐々木への聞き書きが唯一の情報源となったものである。

『遠野物語』一二話を分析した研究としては、一九九七年に遠野常民大学によって刊行された『注釈 遠野物語』の「一二 注釈」を挙げる事が出来る（遠野常民大学一九九七）。ここでは、これまでの埋蔵文化財関係調査報告書や聴き取り調査によって、登場する場所の推定が行われており、重要な指摘となっている。ほかに、石井正己は「蝦夷」という語句の使用から、「古代から縄文時代へのつながりが強調されている」とし、「蓮台野」などの「聖地には遙か遠い縄文時代からの記憶が埋もれている」と解釈している（石井二〇〇九）。このように『遠野物語』一二話について、描かれた舞台や登場するモノについての解釈は行われて来たものの、考古学的事象というやや特殊な記述であるため、民俗学者や文学者には扱い難い内容であり、これまで主要な研究対象とされて来なかった。

## ②『遠野物語』一一二話と佐々木春霞(喜善)『考古古物號記』

### (一)『遠野物語』一一二話の解説

#### 『遠野物語』

一一二 ダンノハナは昔館<sup>タテ</sup>の有りし時代に囚人を斬りし場所なるべしと云ふ。地形は山口のも土淵飯豊<sup>ホ</sup>のも略同様に、村境の岡の上なり。仙台にも此地名あり。山口のダンノハナは大洞<sup>オホホラ</sup>へ越ゆる丘の上にて館址<sup>タテアト</sup>よりの続きなり。蓮台野は之と山口の民居を隔て、相対す。蓮台野の四方はすべて沢なり。東は即ちダンノハナとの間の低地、南の方を星谷と云ふ。此所には蝦夷屋敷と云ふ四角に凹みたる所多く有り。其跡極めて明白なり。あまた石器を出す。石器土器の出る処山口に二ヶ所あり。他の一は小字をホウリヤウと云ふ。こゝの土器と蓮台野の土器とは様式全然殊なり。後者は技巧聊かも無く、ホウリヤウのは模様<sup>モヤウ</sup>なども巧<sup>タクミ</sup>なり。埴輪<sup>ハニワ</sup>もこゝより出づ。又石斧石刀の類も出づ。蓮台野には蝦夷錢<sup>エソセン</sup>とて土にて錢の形をしたる径二寸ほどの物多く出づ。是には単純なる渦紋<sup>ウズモン</sup>などの模様あり。字ホウリヤウには丸玉管玉<sup>マダマ</sup>も出づ。こゝの石器は精巧にて石の質も一致したるに、蓮台野のは原料色々なり。ホウリヤウの方は何の跡と云ふことも無く、狭き一町歩ほどの場所なり。星谷は底の方<sup>カタ</sup>今は田と成れり。蝦夷屋敷は此両側に連りてありし也と云ふ。此あたりに掘れば崇<sup>タケリ</sup>ありと云ふ場所二ヶ所ほどあり。

○外の村々にても二所の地形及関係之に似たりと云ふ

○星谷と云ふ地名も諸国に在り星を祭りし所なり

○ホウリヤウ権現は遠野を始め奥羽一円に祀らる、神なり蛇の

神なりと云う名義を知らず

前話一一一話に「ダンノハナ」「蓮台野」が登場し、それを受けた話となつてゐる。まずは「ダンノハナ」と「蓮台野」の位置関係の説明がある。「ダンノハナ」は館のあつた時代の処刑場で、館跡の続きにあり、「ダンノハナ」の民家のある低地を挟んだ向いに「蓮台野」があるとされる。その後、土器や石器が出土する場所として、「蓮台野」の「星谷」、「ホウリヤウ」の二ヶ所が登場する。「蓮台野」は四方を沢に囲まれた丘陵で、特に南の沢である「星谷」の両側には、「蝦夷屋敷」と云ふ四角に凹みたる所<sup>所</sup>があり、「原料色々」な「あまた石器」、「技巧聊かも無<sup>無</sup>」い土器、「単純なる渦紋などの模様あ<sup>あ</sup>る」蝦夷錢とて土にて錢の形をしたる径二寸ほどの物」などが出土するという。「ホウリヤウ」は「何の跡と云ふことも無く、狭き一町歩ほどの場所」で、「模様なども巧<sup>巧</sup>な」土器「埴輪」、「石斧石刀」、「丸玉管玉」、「精巧にて石の質も一致したる」石器が出土する、という。

『注釈 遠野物語』一一二 注釈「遠野常民大学前掲」では、「星谷」について柳田三五郎(遠野市土淵町山口在住昭和一〇年生まれ)の地域に詳しい人物)の話として「細谷(ほそや)を指していたと思われる。デラノに隣接して下の方は水田になっているが、「おぼこ屋敷」と呼ばれる縄文遺跡があつた(「遠野常民大学前掲」と解説している。「蓮台野」に対する「星谷」と「細谷」の位置関係、「おぼこ屋敷」と「蝦夷屋敷」など符合する点が多く説得力がある。

「石器土器の出る処山口に二ヶ所あり」については「上閉伊郡埋蔵文化財包蔵地調査報告書」(「遠野市文化財調査委員一九六五」)を参考資料として「ひとつは大字山口字高室のデラノ。地目は畑で、遺物は石斧・石鎌・石匙が含まれている。もうひとつはその近くの字石仏。地目は畑で、遺物は容器破片・石斧・石鎌・石匙・石皿・円石・その他管玉がある」(「遠野常民大学前掲」と解説している。

「埴輪」については「古墳の副葬品であるが、遠野には古墳と確認さ

れている遺跡はない。縄文時代の土偶と思われる」（遠野常民大学前掲）としている。岩手県内の埴輪の出土例は、奥州市胆沢区の角塚古墳に關わるもののみで、遠野での出土例は知られておらず、「埴輪」は土偶である可能性が極めて高い。

## （二）『遠野物語』一一二話に描かれた遺跡と遺物

「蓮台野」にあたる場所は、岩手県遺跡台帳では山口Ⅰ遺跡という名称で縄文時代後期及び晩期の土器が出土する散布地として登録されている。筆者らの踏査によると、一般にデンデラノ（＝「蓮台野」と呼ばれる丘陵上の平地では、縄文時代前期後葉から中期前葉、大木六式～七b式段階の土器が採集できる（写真1）。この丘陵の一段下にも狭い平地があり、ここからは土器片及び磨製石斧が採集できる。筆者の聴き取り調査において柳田三五郎（前出）から、「一段下の平地は、今は採草地になっているが、以前はぼっこ屋敷と呼ばれており、ストーンサークルがあった」という証言を得ている。ストーンサークルは縄文時代後期に盛行する配石遺構の一種であり、この地形面には縄文時代後期の遺構・遺物が残されている可能性が高く、ここが「星谷」に相当すると考えられる。

『遠野物語』一一二話の記述と、聴き取り調査による証言、わずかな表採資料から「星谷」の遺跡内容を明らかにするのは困難である。しかし、参考となりそうな近年の発掘調査事例がある。この下流約1kmにある栃内野崎遺跡を二〇一二年に個人住宅造成に伴って発掘調査を行った（黒田他二〇一四）。この遺跡からは縄文時代後期前葉の多量の土器と、円盤状土製品、土偶、多種多様な石材を用いた石鏃などの打製石器類、石英珩岩や輝緑凝灰岩を用いた磨製石斧が、配石遺構に伴って出土した（写真2）。

『遠野物語』一一二話の「蓮台野」からは「原料色々な」あまた石器、「単



写真1 蓮台野(山口Ⅰ遺跡)採集資料



写真2 栃内野崎遺跡出土遺物 [遠野市文化課]

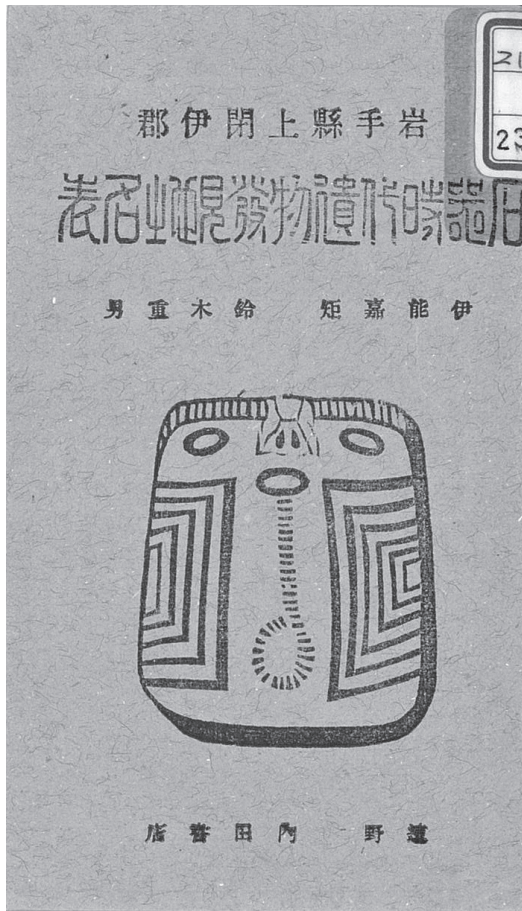


写真3 『岩手県上閉伊郡石器時代遺物発見地名表』

純なる渦紋などの模様あ」る「蝦夷銭とて土にて銭の形をしたる径二寸ほどの物」が出土するという記述があり、これはそれぞれ、多様な石材を用いた打製石器類、円盤状土製品を意味していると推測される。つまり、「蓮台野」の「星谷」は栃内野崎遺跡に類似する様相なのではなからうか。

「ホウリヤウ」の位置については、『注釈 遠野物語』「二二二 注釈」〔遠野常民大学前掲〕では「字石仏」のことであると推測している。根拠資料として提示されている「上閉伊郡埋蔵文化財包蔵地調査報告書」〔遠野市文化財調査委員一九六五〕と同様の記載が、大正一二年に伊能嘉矩・鈴木重男によってまとめられた『岩手県上閉伊郡石器時代遺物発見地名表』〔伊能・鈴木一九二三〕にもある(写真3)。これには、「石佛」の出土遺物として、「容器破片、石斧(磨)、石匙、石鏃、石皿、石剣、圓石、





写真5 ホウリヤウ権現

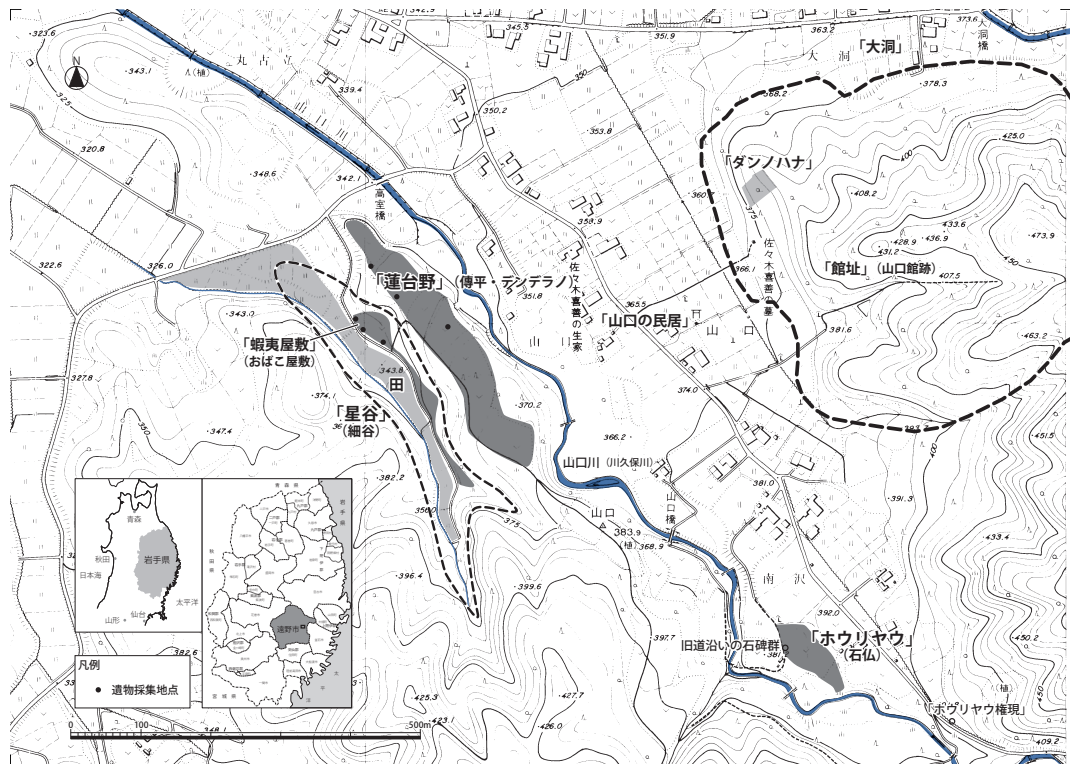


図1 蓮台野・ホウリヤウの位置関係(遠野市管内図に筆者加筆)

(三) 『古考古物號記』の解説

佐々木喜善は、柳田國男に何を語ったのだろうか、柳田の思想のフィ  
ルターを通る前の佐々木の語りの原形を知ることが『古考古物號記』  
である(写真6)。これは、佐々木春霞(喜善)によって記された、自  
身が所有した考古遺物のリストで、表紙に明治三五年(一九〇二年)三  
月一六日の日付がある。縦帖で寸法はタテ一六cm×ヨコ一二cm、和紙に  
墨書されており全一二ページがコヨリで綴られ、所々にメモを書いた貼  
紙がある。原本は佐々木家が所有し、遠野市立博物館に寄託されている。  
佐々木は一九〇〇年に盛岡の予備校である江南義塾に入学し、一九〇二  
年四月から盛岡にある私立岩手医学校に進学したので、医学校進学直前  
の一六歳の時に書いたものである。医学校時代の同級生である高橋菊治  
の回想で、佐々木の事と思われる次のようなものがある「遠野から来て  
いる男でちつとも勉強しないで土器や石器に夢中になっている変わり者  
がいた」(高橋一九七六)。この頃の佐々木は、周りから変わり者と認識  
されるほど、考古遺物に強い興味を持っていたことがうかがえる。なお、  
この文献に記載されている考古資料は佐々木家には伝えられておらず、  
所在不明となっている。

『古考古物號記』明治三十五庚寅年弥生十六日

佐々木春霞生

第一号

明治三十三年七月

菊地長四郎君ヨリ頂戴シタル者

質青色 橋野産

第二号



写真6 『古考古物號記』



明治三十三年八月

佐 新田宗悦ノ持所スルタルヲ菊地長四

郎戴キ余ニ進上ス余又男沢延知ニ

進上ス延知遠野尋常高等小學

校へ献ジタリキ

質ハ砥石ノ色形美長サ三寸五分幅一寸七分 上山口出

第三号

明治三十三年九月 上山口出

瀬川竹次郎君ト鋳銅石ト交易シ

遠野高等小学校ニ献ジタリ

第四号

明治三十三年十二月

厚楽安良エヨリ頂戴ス

質カツ色 山口山出七里山辺トカヤ

(貼紙)

丸古立厚楽外父ヨリ

石器時代コロボークル土人

ノ使用セシ石斧

第五号

明治三十四年四月

傳平ヨリ掘り出シタル者

稲ホ良助先生ニ進上ス

質花園石、長二寸八分

幅一寸五分

第六号

明治三十四年五月

古屋敷萬拾廊君ヨリ頂戴ス

質ハ板石

一戸岩雄ニ進上ス

長サ二寸五分 幅一寸 小形

第七号

第八号 明治三十四年七月

七号ハ青色和野村ヨリ出テ

佐々木徳太郎ヨリ戴ク

長サ二寸九分幅二寸

一戸岩雄ニ

八号モ同人

みかげ様 和野出テ

(貼紙)

土淵村栃内字和野田園ノ

近処ノ畑ヨリ拾得タリト

佐々木得太郎

第九号 明治三十四年八月 後同ジ

山口長太屋敷ホレル際掘出デタ

ル者 カツ色

第十号

上山口出デ

第十一号

山口長太屋敷ヨリ掘出タル者

第十二号

山口長太屋敷ヨリ掘出スタル者

瀬川竹次郎所持

十三号 三十四年七月

土器

上山水車側ヨリ

十四号 三十四年八月

土器

蓮平 出

十五号

明治三十四年七月

田尻村川向ヨリ堀セシ者

青色

古屋敷萬拾郎君へ

十六号 三十四年四月

傳平

十七号 以上 三十四年七月

上山口

十八号 三十三年九月

傳平

十九号 三十四年八月

上山口

二十六号

石斧

明治三十五年三月十六日

菊地金右エ門ヨリ

和野出デ

二十号 三十四年八月

上山口 出

二十一号 三十四年九月

傳平

二十二号

傳平 三十四年九月

第二十三号 三十四年八月

傳平出 石斧

長サ三寸 カケ

武田ニ進ス

二十四号 三十四年十月

中田ヨリ拾得

一寸強

武田ニ進ス

二十五号

第一号 三

三十四年三月

青色 上閉伊郡橋乃村

第二号 三

三十四年五月

灰石砥石

第二六号

(貼紙)

明治三十五年三月十六日

出所八和野村

コロホークル土人使用セシ石

斧

一〇号

第十七

(貼紙)

明治三十三年十一月二十九日瀬河

竹次郎君ニ作文葉ヲ返シニ

行次ニ山口上水車ノ処ニ行遊ス

時ニ此ヲ拾竹次郎君我石鏃

(裏)

石刀ノ片ト思ハル

ヲ拾ヘ交換シタリキ

第十三号

土淵村字山口傳平野ヨリ

三十四年五月不詳日

第十四号

和野畑ヨリ

三十四年六月不日

記載内容は表1にまとめた。一から二六まで番号が振られており、そのうち、一、二、一三、一四、一七、二六は番号が重複して二回登場する。二五は番号のみの記載で、それ以外の記載はない。他は明治三三年三月から明治三五年三月一六日までの年月(一七、二六は日付も)、入手先(一、二、四、六、七、八、二六、一七)、採集場所(六を除く)、色(一、二、七、九、一五)、素材(五、六)、種別(四、一三、一四、一七、二三、二六)、寸法(二、五、六、七、二三、二四)、譲渡先(二、三、五、六、七、八、一二、二五、二三、二四)などが記載されている(写真7)。二六番が明治三五年三月一六日で表紙の年月日と同じであり、二六番を入手した時点でまとめられ、それ以

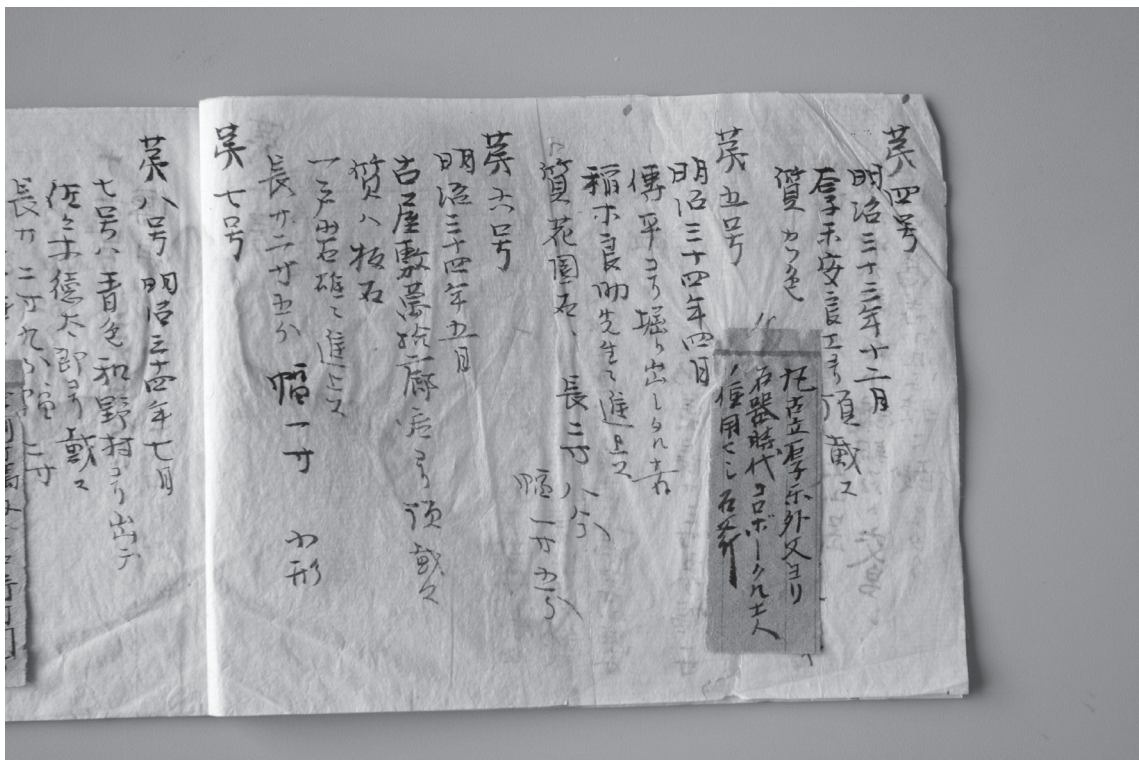


写真7 『古考古物號記』(傳平の文字が見える)

表1 『古考古物號記』記載資料一覧

資料番号	入手年月日	入手先	採集場所	色	素材	種別	サイズ	サイズ	譲渡先	備考
1	明治33年7月	菊地長四郎	上閉伊郡橋野村	青	-	-	-	-	-	-
2	明治33年8月	新田宗悦→菊地長四郎	上山口	砥石の色	-	-	長さ3寸5分、幅1寸7分	10.6cm×5.15cm	男沢延知→遠野尋常高等小学校	-
3	明治33年9月	-	上山口	-	-	-	-	-	瀬川竹次郎→遠野尋常高等小学校	瀬川竹次郎の鉾銅石と交換
4	明治33年9月	厚楽安良衛	山口山から七里の山辺	-	-	石斧	-	-	-	丸古立の厚楽外又から石器時代コロボックルが使った石斧と聞く
5	明治34年4月	-	傳平	-	花園石	-	長さ2寸8分、幅1寸5分	8.48cm×4.54cm	稲穂良助先生	-
6	明治34年5月	古屋敷萬拾郎	-	-	板石	-	長さ2寸5分、幅1寸	7.57cm×3.03cm	一戸岩雄	小形
7	明治34年7月	佐々木徳太郎	和野村	青	-	-	長さ2寸9分、幅2寸	8.78cm×6.06cm	一戸岩雄	-
8	明治34年7月	佐々木得太郎	土淵村栃内字和野田園に近い畑	-	みかげ	-	-	-	一戸岩雄	-
9	明治34年8月	-	山口長太屋敷	褐色	-	-	-	-	-	-
10	明治34年8月	-	上山口	-	-	-	-	-	-	-
11	明治34年8月	-	山口長太屋敷	-	-	-	-	-	-	-
12	明治34年8月	-	山口長太屋敷	-	-	-	-	-	瀬川竹次郎	-
13	明治34年7月	-	上山口水車	-	-	土器	-	-	-	-
14	明治34年8月	-	蓮平	-	-	土器	-	-	-	-
15	明治34年7月	-	田尻村川向	青	-	-	-	-	古屋敷萬拾郎	-
16	明治34年4月	-	傳平	-	-	-	-	-	-	-
17	明治34年7月	-	上山口	-	-	-	-	-	-	-
18	明治33年9月	-	傳平	-	-	-	-	-	-	-
19	明治34年8月	-	上山口	-	-	-	-	-	-	-
20	明治34年8月	-	上山口	-	-	-	-	-	-	-
21	明治34年9月	-	傳平	-	-	-	-	-	-	-
22	明治34年9月	-	傳平	-	-	-	-	-	-	-
23	明治34年8月	-	傳平	-	-	石斧	長さ3寸	9.09cm	武田	欠け
24	明治34年10月	-	中田	-	-	-	長さ1寸	3.03cm	武田	-
25	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26	明治35年3月16日	菊地金右エ門	和野	-	-	-	-	-	-	-
1(2)	明治33年3月	-	上閉伊郡橋野村	青	-	-	-	-	-	-
2(2)	明治33年5月	-	-	-	-	-	-	-	-	灰石砥石
26(2)	明治35年3月16日	-	和野村	-	-	石斧	-	-	-	コロボックル使用、10号
17(2)	明治33年11月29日	瀬川竹次郎	山口水車	-	-	石鏃	-	-	-	瀬川竹次郎の石刀の欠片と交換
13(2)	明治34年5月	-	傳平野	-	-	-	-	-	-	-
14(2)	明治34年6月	-	和野の畑	-	-	-	-	-	-	-

降は追加されていないことを示している。

ここに登場する採集場所とその回数は多い順に、上山口（上山口水車、山口上水車とも表記）が九回、傳平（蓮平、傳平野とも表記）が八回、和野（和野村とも表記）が六回、山口長太屋敷が三回、橋野（橋乃村とも表記）が二回、山口山、田尻村川向、中田がそれぞれ一回である。上山口とは、佐々木の住んだ土淵町山口の上（カミ）という意で、この地区では東の山側を上と呼んでいるため、山口の東側の地点を指すものとみることができる。傳平はデンデエラ、つまりデンデラノを示している。和野は山口の北西に隣接する地区名である。

遺物の種別名称として登場するのは、石斧（四、二三、二六）、石鏃（二七）、土器（一三、一四）のみであり、種別名称が無記載のものが多い。寸法が記載されているものが六点あり、長さ三寸前後で幅一寸五分前後のもの五点（二、五、六、七、二三）と一寸のもの一点（二四）の二種に大別できる。長さ三寸前後（約一〇cm）幅一寸五分前後（約四・五cm）はこの地域で出土する磨製石斧のサイズと一致する。

四の石斧の貼紙の注記には「コロボークル土人ノ使用セシ石斧」とあり、二六の貼紙注記にも同様の記述がある。佐々木は当時、土器石器を残した人々が「コロボークル」であるという認識であったことがうかがえる。

入手先、讓渡先として一人の名前が登場する。瀬川竹次郎、一戸岩雄、武田（武？）は親しい友人で佐々木喜善の日記にしばしば登場する人物である。

### ③ 佐々木喜善は何を語ったか

『古考古物號記』に見られる考古遺物の採集地点と、遺物の種類は概ね『遠野物語』一二話に共通する部分が多いことから、佐々木が少年期に体験した考古遺物の採集が語りの元になっているのは間違いないで

表2 『遠野物語』112話と『古考古物號記』の比較

	『遠野物語』112話 (1910)		古考古物號記 (1902)	
遺跡	蓮台野	ホウリヤウ	傳平野	上山口
遺物	粗雑な土器, 単純な渦文がある蝦夷錢, 様々な石材の石器	巧みな文様がある土器, 埴輪, 石斧, 石刀, 丸玉, 管玉, どれも同じ石材を用いた精 巧な石器	土器, 石斧 (長さ三寸), 石斧? (花園石, 長さ2寸8分, 幅1寸5分)	土器, 石斧? (砥石の色, 長さ3寸5分, 幅1寸7分), 石鏃, 石刀
先住民	蝦夷		コロボークル	

あろう(表2)。

佐々木は『考古古物號記』を記した翌年に盛岡の医学校を中退して、小説家を目指して上京する。その後民話研究家となり、大正一三年九月『遠野』第一号に「地震の揺らないと謂ふ所」(佐々木一九二四)という文章を著す。これに「蓮台野」に関する以下のような記述が見られる。

#### 「地震の揺らないと謂ふ所」

右のデンデエノに就いては、蓮台野と書くだらうと言ふやうに美化されて居りますが、(今日の智識で)然し何の村で聴いても、どうもレンダイノとは発音をしないで、デンデエノであります。私の住むで居る所のデンデエノなどには、棄老口碑がありまして、昔此郷で、齡六十歳になれば皆此のデンデエノに棄てたのだと言はれて居りまして、其の墓標の石のやうな自然石の基立したのや、所々に凹形の低地などが散在して居ります。此辺石器土器など出ることば夥しいのであります。

(中略)

デンデエノと謂ふ所には基石が多く散在して居た所だから、棄老口碑が生れ又掘土手や凹地や石器土器がざらにあつたものだから、さうした人達の住んだ跡のやうに後世の人が考へたものも分かりませぬ。

この文章には佐々木の「蓮台野」に対する考え方が明確に記されている。佐々木が柳田に語った時、一一一話の主題となった「ダンノハナ」「蓮台野」を説明するべく、「ダンノハナ」が昔、館のあつたときの処刑場だったとか、「蓮台野」の集落内の位置関係などを語った上で、棄老伝説が生まれた原因として、「石器土器」が出土し「凹形の低地」があるなど昔の人の生活痕跡があつたためであるということ語ったのである。

る。佐々木が考古学的な話を柳田に語った意図はここにあると考えられる。

#### ④ 柳田國男は何を感じたるまゝ、書いたか

『遠野物語』一一二話を読み、佐々木の文章と比較をすると、柳田が特に強調している部分が浮かび上がってくる。

一一二話の冒頭から「ダンノハナは館の有りし時代に囚人を斬りし場所」さらに「館址よりの続き」とダンノハナの時代が強調されている。また、「蓮台野」と「ダンノハナ」の位置関係も「民居を隔て、相對す」とし、その関係性を強調しているように見える。

「蝦夷屋敷」や「蝦夷錢」は、佐々木の文章には登場しない用語であり、佐々木がこの言葉を用いて語ったかは定かではなく、柳田が「蝦夷」という語句を好んで使用した可能性もある。

「ホウリヤウ」という語句は地名として佐々木の他の文章には見られない。『考古古物號記』には「上山口」という地名を用いており、鈴木重男・伊能嘉矩『岩手縣上閉伊郡石器時代遺物發見地名表』には「石佛」という地名で記載されている。柳田は「ホウリヤウ」について注を付けており、その興味の程を伺うことができる。佐々木が場所の説明として使用した「ホウリヤウ」をあえて地名として採用したのではないだろうか。

柳田は明治四二年三月『珍世界』三號に「天狗の話」(柳田一九〇九a)という文章を著し、その中に柳田の先住民観を看取できる。以下関係する記述を引用する。

#### 「天狗の話」

中學校の歴史では日本の先住民は残らず北の方へ退いたやうに

書いてあるが、根據の無いことである。佐伯と土蜘蛛と國巢と蝦夷と同じか別かは別問題として、これ等の先住民の子孫は戀々として中々この島を見捨てはせぬ。奥羽六縣は少なくとも頼朝の時代までは立派な生蠻地であった。アイヌ語の地名は今でも半分以上である。

柳田は先住民を「アイヌ」＝「蝦夷」とし、「奥羽六縣は少なくとも頼朝の時代までは立派な生蠻（蠻）地」であったと考えていた。

あわせてまた、明治四二年（一九〇九）五月一六日に開催された「山岳会」第二回大会での柳田の講演が明治四二年一月三日『山岳』第四年第三号に掲載された「山民の生活」〔柳田一九〇九b〕からも先住民観と、それに関連して地方で祀られる由緒不明の神について、柳田の考え方を伺い知ることができる。ここでは「アイヌ語の「ヤチ」（湿地）」「柳田前掲」を取り上げ、「我々の祖先は現にアイヌの祖先が居住して居る所へ後から入って来て。アイヌの経済生活にはあまり大關係の無い谷合の卑濕の地を占有して田を開き其附近に住居を構へた」〔柳田前掲〕と推定し、「彼等と雜居すること稍久しくなければ決して此等の名詞を受け伝へる筈がありません」〔柳田前掲〕と、先住民と日本人はやや久しく併存關係にあったことを推定している。更に「サイノ神」や「荒神」は今日の有様では社を立てた趣旨の不明に成った所もありますが、つまり皆日本人の植民地と蕃界との中間に立てた一種の標識であつて」〔柳田前掲〕と、「サイノ神」や「荒神」などに代表される由緒不明の神は、併存關係にあつた先住民と日本人の境界標識であつたとしている。

ここで『遠野物語』一一二話をもう一度読み返して見ると、ここに描かれた景色が「天狗の話」や「山民の生活」に見られる柳田の先住民観にはほぼ一致する。『遠野物語』の「館の有りし時代」は、「天狗の話」の「頼朝の時代」に符合し、『遠野物語』のダンノハナと蓮台野の間の「山

口の民居」の低地は、「山民の生活」の「ヤチ」にあたる。当時の日本人が住んだ低地「ヤチ」とは異なる立地の「蓮台野」「ホウリヤウ」には土器や石器、住居跡のような凹地があり先住民が住んでいた痕跡がある。そして、「ホウリヤウ」という地名の由来になっている「ホウリヤウ権現」を由緒が明かではない神と位置付けることで、境界を示す「標識」の名残が確かにあるのだということを示唆している。ここで注意しなければならないのは、『遠野物語』一一二話の時代を示す言葉が「館の有りし時代」しか無いことである。そのことで、蓮台野やホウリヤウに住んだ先住民と館を築いた人々と同じ時代に生きていたということ、暗に示しているのではないだろうか。

## おわりに

以上、柳田國男の考古学的関心の所在を明らかにするため、『遠野物語』一一二話の解説を行ってきた。

『遠野物語』一一二話は、佐々木喜善の少年期の実体験が元になっていることが『考古古物號記』の解説で明らかとなり、「地震の揺らないと謂ふ所」から佐々木の語りの意図を捉えることができた。しかしその意図を越え、柳田國男は「天狗の話」「山民の生活」に記したような先住民の姿を佐々木の語りから汲み取り、それを『遠野物語』一一二話に描き出した。

つまり、佐々木喜善は柳田國男に、自身が生まれ育った地にある不思議な場所の話として、「ダンノハナ」と「蓮台野」について語り、「蓮台野」の棄老伝説とその由来を説明するために、少年時代に体験した考古遺物採集の話をした。それを聞いた柳田は、当時自身が持っていた先住民観との一致を見て、より深く佐々木の話を書き残した。それが『遠野物語』一一二話なのである。この話には、柳田が考えたかつての日本

人と先住民の併存モデルが描かれている。

本稿の検討で、柳田國男の考古学的関心は、日本人と先住民との関係を探るために寄せられたものであることが、より明確となった。更に、これまで『遠野物語』を考古学の視点で検討するということはほとんど行われて来ず、本稿は分野の垣根を越えて『遠野物語』の新たな可能性を探究する一歩を踏み出すものとなった。

遠野に在る考古学に携わる者としての責任を果たすべく、これまで筆を進めてきた。このような研究の積み重ねは、『遠野物語』や柳田國男についての理解を深めるばかりでなく、遠野という土地の魅力を更に引き出すことに繋がると信じて、今後も探求を続けて行きたい。

謝辞

本稿は、二〇一三年六月二日に遠野市で開催された国立歴史民俗博物館共同研究「柳田國男収集考古資料の研究」研究会において口頭発表した内容をもとに、資料の分析を進めて書き起こしたものである。研究会にお招きいただき発表と執筆の機会を与えていただいた、研究代表者の東京大学設楽博己教授をはじめとした研究員の皆様に御礼を申し上げます。また、『遠野物語』一・二話に描かれた場所や『古考古物誌』に登場する人物や場所については柳田三五郎氏に多くのご教示いただいた。『古考古物誌』の文字解説にあたっては遠野市遠野文化研究センター調査研究課小笠原晋課長（当時）、同課前川さおり課長補佐、遠野市立博物館長谷川浩係長にご協力いただき、遠野文化研究センター小向孝子部長をはじめとする同センターの職員からは温かい励ましの言葉をいただいた。また、遠野市教育文化振興財団伊香学氏には英文要旨の翻訳にご協力頂いた。心から感謝申し上げます。

参考文献

- 石井 正己 一九九七 『遠野物語』三部作の成立』注釈 遠野物語』筑摩書房 六一―八頁
- 石井 正己 二〇〇〇 『遠野物語の誕生』若草書房
- 石井 正己 二〇〇九 『遠野物語』を読み解く』平凡社 二〇―二二頁
- 伊能嘉矩・鈴木重男 一九二三 『岩手縣上閉伊郡石器時代遺物發見地名表』内田書店
- 及川勝徳・梅田取得 一九六一 『山口包含地』『埋蔵文化財調査報告書（二）』
- 菊池 照雄 一九六九 『佐々木喜善―遠野伝承の人―』遠野市立博物館一六頁
- 黒田篤史・向山直見・佐藤浩彦 二〇一四 『栃内野崎遺跡発掘調査報告書』遠野市埋蔵文化財調査報告書第一集 遠野市教育委員会
- 佐々木喜善 一九二四 『地震の揺らないと謂ふ所』『遠野』第一号 遠野郷土館 一八―一九頁（遠野市立博物館『佐々木喜善全集（Ⅱ）』四五―五頁）
- 佐々木春霞 一九〇二 『古考古物誌記』
- 佐藤 誠輔 二〇〇四 『遠野先人物語』佐々木喜善小伝 日本のグリム』遠野市教育文化振興財団 一四頁
- 設楽 博己 二〇一三 『柳田國男とミネルヴァ論争』『みずほ別冊 弥生研究の群像』大和弥生の会
- 鈴木 重男 一九二六 『土淵村今昔物語』
- 高橋 喜平 一九七六 『遠野物語考』創樹社 一一頁
- 谷川 健一 一九七二 『遠野物語』解説』『遠野物語』大和書房
- 遠野市文化財調査委員 一九六五 『上閉伊郡埋蔵文化財包蔵地調査報告書』（原本未確認）
- 遠野常民大学 一九九七 『一・二話』注釈』『遠野物語』筑摩書房 三三―三二頁
- 三島由紀夫 一九七〇 『遠野物語』について』読売新聞
- 柳田 國男 一九〇九 a 『天狗の話』『珍世界』三号 光村出版部（筑摩書房『定本柳田國男第四卷』四二―四二頁）
- 柳田 國男 一九〇九 b 『山民の生活』『山岳』四卷三号 日本山岳会（筑摩書房『定本柳田國男第四卷』五〇―一五〇二頁）
- 柳田 國男 一九一〇 a 『石神問答』聚精堂（筑摩書房『定本柳田國男第十二卷』一一―一六二頁）
- 柳田 國男 一九一〇 b 『遠野物語』聚精堂（筑摩書房『定本柳田國男第四卷』一―一五四頁）

（遠野市遠野文化研究センター文化課、国立歴史民俗博物館共同研究者）

（二〇一五年七月一七日受付、二〇一六年一月二九日審査終了）



表3 関係人物略年譜

年号	西暦	柳田國男 (1875-1962)	佐々木喜善 (1886-1933)	伊能嘉矩 (1867-1925)	鈴木重男 (1881-1939)
明治 25	1892			再び上京	
明治 26	1893			坪井正五郎から人類学を学ぶ	
明治 27	1894				
明治 28	1895			台湾へ渡る	
明治 29	1896				
明治 30	1897				
明治 31	1898			東京人類学会雑誌に投稿	
明治 32	1899			東京人類学会雑誌に投稿	
明治 33	1900		盛岡の江南義塾入学 帰郷時に考古遺物採集		
明治 34	1901				
明治 35	1902		『古考古物號記』を著す 医学校入学		
明治 36	1903	考古学会入会	医学校中退 上京		
明治 37	1904				
明治 38	1905				土淵小学校校長着任
明治 39	1906		鈴木重男と出会う		佐々木喜善と出会う
明治 40	1907			東京人類学会雑誌に投稿	
明治 41	1908	佐々木喜善と出会う 11月間書きを始める(翌5月まで)	柳田國男と出会う	遠野に帰郷	
明治 42	1909	「天狗の話」「山民の生活」を著す 遠野を訪れ伊能嘉矩、鈴木吉十郎らと出会う		柳田と出会う	父が柳田と出会う
明治 43	1910	『石神問答』『遠野物語』出版	伊能嘉矩と出会う？		
明治 44	1911				
大正元	1912		遠野に帰郷		
大正 2	1913				
大正 3	1914				
大正 4	1915				
大正 5	1916				
大正 6	1917				
大正 7	1918			人類学雑誌に投稿	
大正 8	1919				
大正 9	1920	遠野を訪れる、喜善、伊能、重男らと会う			柳田と会う
大正 10	1921				
大正 11	1922				
大正 12	1923			『岩手縣上閉伊郡石器時代遺物發見地名表』を著す	
大正 13	1924		「地震の揺らないと謂ふ所」を著す		遠野郷土館開館
大正 14	1925			死去	
昭和 1	1926	遠野を訪れる、遠野郷土館を見た可能性あり			『土淵村今昔物語』を著す
昭和 2	1927				郷土館焼失

## Kunio Yanagita's Archaeological Interest of *Tono-Monogatari* (The Legends of Tono)

KURODA Atsushi

It has not been paid attention very much to an archaeological description of the Episode 112 in *Tono-monogatari* which is known as Kunio Yanagita's monumental work. This report considers Kunio Yanagita's archaeological interest through clarifying the writing process and the background of the Episode 112 in *Tono-monogatari*.

The talk of Kizen Sasaki, a narrator of legends and stories, deeply participates in the process of writing *Tono-monogatari* the most. After understanding what was written in the Episode 112 in *Tono-monogatari*, I read *Kokoukobutsu-gouki* (The description of archaeological artifacts Kizen Sasaki collected in his childhood) carefully to investigate an original form of his talk. In *Kokoukobutsu-gouki*, there were descriptions of collected-sites and shapes of archaeological artifacts he studied mainly in his local area, and it corresponds with contents of the Episode 112 in *Tono-monogatari* roughly. In addition, there was an archaeological description in *Jishin-no-yuranai-to-iutokoro* (The place to be told that the earthquake never occur) written by Kizen Sasaki in his after years, and I was able to find the Kizen Sasaki's intention of telling the original form of the Episode 112 in *Tono-monogatari* to Kunio Yanagita.

Through this revealing process of Kizen Sasaki's original form of his story, I found that his intention had not been seemed to be reflected perfectly in the Episode 112 in *Tono-monogatari* written by Kunio Yanagita. Kunio Yanagita's intension occurred this gap. What was Kunio Yanagita's intension? I was able to find an answer in *Tengu-no-hanashi* (The story of the long-nosed goblin) and *Sanmin-no-seikatsu* (The life of the citizen living in mountain areas) which were written by Kunio Yanagita when he was writing *Tono-monogatari* by listening from Kizen Sasaki. Kunio Yanagita had an understanding of that "Emishi as indigenous people" and "The Japanese" were coexisting in an adjacent area at least in northeastern Japan until the Kamakura period. Comparing to these above documents, it was revealed that Kunio Yanagita's thought for indigenous people had been appearing strongly in the Episode 112 in *Tono-monogatari*. Through examination of this report, it became more obvious that Kunio Yanagita's archaeological interest took a great interest in to investigate the relations between "Emishi as indigenous people" and "The Japanese".

Key words: Kunio Yanagita, Kizen Sasaki, *Tono-monogatari* (The Legends of Tono), *Kokoukobutsu-gouki* (The description of archaeological artifacts Kizen Sasaki collected in his childhood), Indigenous people, Archaeology

---